

コロナ禍で行われた民俗調査への影響

——民俗調査実習、卒業論文を事例として——

山口睦

1 はじめに

本論は、対面でのインタビュー調査を中心とする民俗調査が、コロナ禍においてどのような影響を受けたかについて明らかにすることを目的とする。

筆者の専門分野である文化人類学においては、対面のインタビュー調査や、調査対象者と直接交流する参与観察を主たる調査方法としている。筆者が所属する山口大学人文学部社会学コース、民俗学・文化人類学分野においては、3年生を対象とした民俗調査実習、4年生の卒業論文を同様の手法において行っている。3年次の民俗調査実習では、例年、山口県内の市町村を1か所選択し、10名前後の学生が調査テーマを各自設定し、9月下旬に3泊4日の調査実習を行う。4年次の卒業論文では、同様の手法で、各自が設定したテーマに基づいて個人単位で調査を進める。しかし、2020年度は、特に3年次の民俗調査実習においてコロナ感染予防のため泊りがけの調査が取りやめとなり、各学生の親族・知人等の人的ネットワークを活用した調査テーマを設定するように変更した。また、2020年7月には山口大学内で感染者が発生したため、感染予防を第一として、対面調査ではなく、電話やオンライン面談などの手法を推奨するにいたった。

ここにおいて、従来対面調査によって得られていた人々の生活や地域の行事、習俗などについての聞き取りデータに、コロナ禍において新たな調査手法を用いたことによってどのような影響が現れたのかについて、把握、分析する必要性が生じた。本論では、2020年度山口大学人文学部社会学コース民俗学・文化人類学分野に所属した3、4年生を対象として、民俗調査実習、卒業論文における調査手法の変化とその影響について検討、分析を課題として設定する。

1.1 先行研究

コロナ禍で行われる民俗調査へどのような影響が出ているかについては、管見の限りあまり研究はない。恩田守雄が、マレーシアの農村において2020年11月、12月にオンライン・インタビューを行い、互助慣行について調査を行ったという報告がある（恩田 2021）。マレーシアでは国内移動が制限されており、現地の大学の日本語講師や大学院生に調査、通訳を依頼した。現地ではWi-Fi環境が十分でないため、恩田はvideo callを通して調査対象者が写るスマートフォンの画面をノートパソコンのカメラを通してZoomに映して調査を行った。「限られたオンライン・インタビュー調査であったが、少しでも現地の実情を知ることができると判断し代替手段として行った」とある（恩田 2021 : 30）。海外調査が必要である研究では、調査対象者を探せばオンライン・インタビューも代替手段となることが

分かる。

大学の教育現場におけるオンライン授業やコロナ禍が及ぼす影響については、多くの報告がなされている。国際医療福祉大学におけるオンライン授業の対応について（谷口他 2021）、理系学生のオンライン授業への意識調査（辛島 2021）、オンライン学習状況についての九州大学と北京大学の比較（黄他 2021）、北海道大学歯学部 6 年生へのアンケート調査（飯田他 2021）、大学における体育の開講状況について（山津 2021）、オンライン被服製作実習についての調査（山中他 2021）などについて報告がなされている。

大学教育の中でも実習形式の授業については各大学が試行錯誤している。飯田俊二らは北海道大学歯学部 49 期生（2020 年度 6 年生）51 名を対象としたアンケートを実施した。歯学部における臨床実習は 5 年次（2019 年）の 9 月から 2020 年 2 月までは順調に実施されていたが、3 月 2 日に中断し、3 月～8 月の未実施の実習期間の内容を 9 月、10 月の 2 か月で終了させるようにスケジュールが見直された（飯田他 2021：45）。臨床講義はオンラインで実施、臨床実習については 3 月から 7 月まで実施できず、院外実習や訪問診療見学などが中止、講義やレポートによる代替案によって国家試験の受験資格が認められたという。

山中大子らはオンラインによる被服製作実習「刺し子」の実施について報告している。2020 年 6 月から 8 月に X 大学で、小学校または中・高等学校家庭科教員を養成するコースの大学 3 年生 8 名を対象としてオンラインで被服製作実習が行われた。被服製作実習は「製作中の教え合いやおしゃべりなどの学習者間コミュニケーションが自然とされている」が、オンライン実習では周囲とのコミュニケーションが遮断されていた。対面実習では学生相互の教え合いによって問題解決が行われ、学生同士は意見交換で刺激を受け、つまらないことや辛いこともひとりで抱え込まずにすみ、飽きずに製作を続けられていたことが明らかになった。山中らは、「教師の説明よりむしろ、周囲とのコミュニケーション（周りの様子をうかがうこと、友人との交流、教師や友人への質問・相談）を通して学びを進めていることが示唆された」と指摘している（山中他 2021：56）。

以上のように先行研究では比較的感染者の多い都市部を対象としたものが多く、また実習の内容も学内や連携している専門機関内で行われている。後述するように 2020 年 6 月から一部の対面授業を再開していた山口大学で、地域社会の中で一般の人々に対する対面調査を基本とする民俗調査実習や卒業研究がどのように行われたかについて記録することには一定の意義があろう。したがって、本論ではコロナ禍における民俗調査実習、卒業論文の取り組みを記録し、オンライン調査のメリット、デメリットや、コロナ禍で実施した民俗調査にどのような影響がでたのかについて検討する。

1.2 山口県の感染状況

ここでは、山口県の感染状況について述べる。月毎の新型コロナウイルスの新規感染者数について、全国と山口県の状況を示したグラフが図 1 である。2020 年 1 月から 2021 年 12 月末までの感染者は 5,844 人、死者数は 93 人である。山口県の感染状況は、全国の感染状

況と連動しており、2021 年末までに 5 回の波があった。

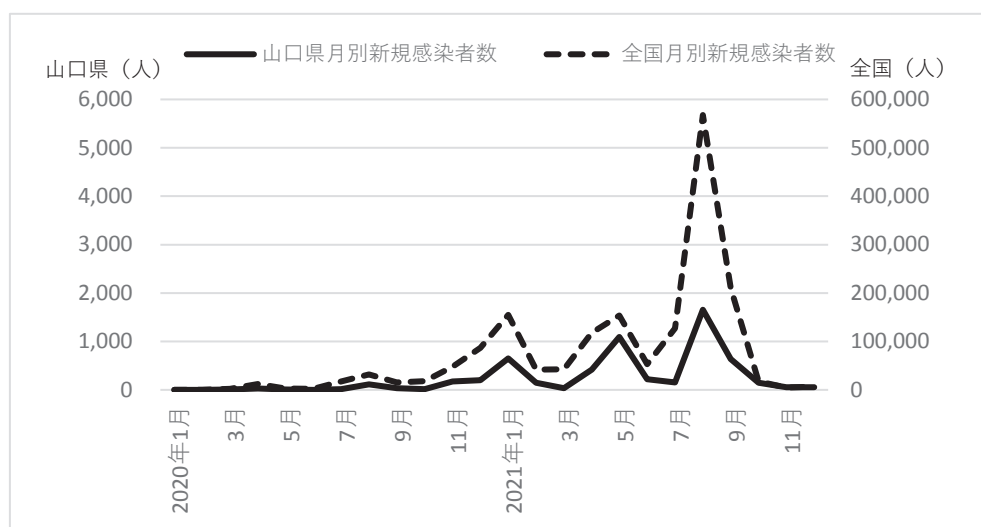


図1 全国と山口県の月別新規感染者数¹⁾

また、本論の調査期間中に発令された緊急事態宣言は、2020 年 4 月 7 日から 5 月 6 日まで埼玉、千葉、東京、神奈川、大阪、兵庫、福岡、4 月 16 日からは全都道府県、2021 年 1 月 7 日から 3 月 21 日まで千葉、神奈川、埼玉、東京、1 月 14 日からは栃木、愛知、岐阜、京都、大阪、兵庫、福岡となっている²⁾。2021 年 12 月まで、山口県自体には、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置は発令されなかった。しかし、隣接する福岡県に 4 回、広島県に 2 回発令され、後述するように 4 年生が就職活動で訪問する近畿や関東地方における発令は学生の生活に大きな影響を与えた。山口大学では、2020 年 2 月 28 日「新型コロナウイルス感染症に関する注意喚起について」第 1 報から 2021 年 9 月 24 日の第 17 報（改定）まで、健康観察の要請、体調不良時の報告、国内移動時の注意事項、海外への渡航の自粛や禁止、相談窓口の詳細、PCR 検査の取り扱いなどについて注意喚起を提示している³⁾。その中でも、「緊急事態宣言が発令された場合の取り扱いについて」において、全職員・学生に対して緊急事態宣言の対象都道府県への移動を控えること、やむを得ず移動する場合は所属部局への届け出が必要であり、帰着者は所属部局及び保健管理センターへ連絡し、2 週間は自宅に滞在するよう要請された。また、講義においては、自宅待機中の学生に対してオンライン授業や課題などの代替措置を取るよう要請された。後述するように、この 2 週間の自宅待機要請は、調査実習や卒業論文に取り組む学生の行動に大きな影響を与えた。

2 山口大学人文学部社会学コース、民俗学・文化人類学分野概要

2.1 本調査の概要

本調査は、「1 はじめに」で述べたような問題意識に基づき、2021 年 1 月末から 2 月初旬にかけて、民俗学・文化人類学分野に所属している 3 年生 16 名、4 年生 12 名に調査協

力依頼を行った。内容としては、各学生が 2020 年 4 月から行った調査の概要について（調査の日付、方法、場所、インタビュー時間、内容）、また質問紙⁴⁾でコロナの影響について回答してもらった。結果として、3 年生 10 名、4 年生 10 名から回答を得た。その中から、18 名に筆者がインタビュー調査を行い、より詳細なデータを得た。

調査に協力した学生のテーマは、表 1（3 年生）、表 2（4 年生）の通りである。テーマによって、調査地や調査対象者が異なるため、基礎情報として表に記す。対面、電話、OL、文字は調査の方法を示し、各学生がどの方法を実施したかについて○×で記した。

表 1 3 年生の基礎データ

学生	テーマ	影響	調査	出身地	対面	電話	OL	文字
A	女性における化粧の役割やその変化について	有	県外	岡山	○	○	×	○
B	働く女性に子育てが与える影響について	有	県外	福岡	○	○	○	○
C	「日本のクリスマスは山口から」について	無	県内	大分	○	×	×	○
D	夏みかんの栽培と生産者の思いについて	有	県内	山口	○	○	×	×
E	新型コロナウイルス流行下における手作りマスク	有	両	岡山	○	×	○	×
F	東彼杵町におけるお茶づくり	有	県外	長崎	○	○	○	×
G	大分県中津市の犬丸天満宮御神幸祭について	有	県外	大分	○	○	×	○
H	久留米市田主丸町におけるどうごもり	有	県外	福岡	×	○	×	×
I	中国人留学生のネットワークについて	有	両	沖縄	○	×	○	×
J	女性と制服の関係について	有	県外	宮崎	○	○	×	×

・コロナ禍の影響の有無は、質問紙調査の回答を記している。調査地…県内＝山口県内、県外＝山口県外、両＝山口県内・県外の両方を含む。OL…オンライン、LINE 通話、Zoom などを含む。文字…LINE、メール、手紙などを含む。以上、表 2 も共通である。

表 2 4 年生の基礎データ

学生	テーマ	影響	調査地	出身地	対面	電話	OL	文字
K	地域のスポーツ教育におけるプロサッカーチームの役割—レノファ山口を事例に—	有	県内	山口	○	○	×	×
L	ハイブリッドな社会における人と野良猫の関係の築き方—山口市の猫管理団体を事例に—	無	県内	広島	○	×	×	×
M	コロナウイルス流行下における祭礼の存続と地域関係の関係性	有	県内	広島	○	×	×	○
N	地酒を造る清酒製造業者の努力と展開—山口県の中小清酒製造業者を例に—	有	県内	福岡	○	○	×	×
O	地域における子育て支援の担い手—山口県山口市ファミリーサポートセンター事業を事例に—	有	県内	鹿児島	○	×	×	○
P	祭りの継承と変化—船川八幡宮秋季大祭を事例として—	有	県外	岡山	○	○	×	○
Q	寄り鯨の処理と活用—山口県北部地域の事例を中心に—	有	県内	山口	○	○	×	×
R	朝市が果たす社会的役割—JA ひらかわ朝市を事例として—	有	県内	兵庫	○	○	×	×
S	手仕事とマテリアリティ—山口県山口市仁保の靴職人を事例に—	無	県内	熊本	○	×	×	×
T	コロナ禍における飲酒の場—オンラインサービスのサードプレイス論からの考察—	有	県内	福岡	○	○	○	×

2.2 指導体制の概要と変化

コロナ以前の3年次の調査実習は、次のような流れで行っていた。前期に過去の調査報告書の読み込み、調査テーマの決定、関連文献の発表、質問項目の設定、調査対象者の選定などを行う。質問項目は、基本的に半構造化インタビューの形式をとっている。6月下旬から7月上旬に日帰りで予備調査を行い、9月下旬に3泊4日で本調査を行う。学生と教員3名が同じ宿泊施設に泊まり、日中は各自の調査、夜間には、その日の調査報告を行っていた。学生は、毎日1〜3人の話者と会い、インタビュー調査を行う。後期には、そのデータをもとに、報告書を執筆する。11月に日帰りで補足調査を行う。12月以降に各自のデータをもとに、写真、図表を加えて1章分として執筆し、全学生分をまとめて1冊の報告書として3月に刊行する。2019年までの調査地は、おもに山口県内（ないし隣県）の市町村から選んでいた。なお、山口大学人文学部社会学コースでは、社会調査士資格が取得できる。この調査実習は資格認定のための必須科目になっている⁵⁾。

以上の方法は、コロナ禍において特に本調査が合宿形式であるところに感染対策上の問題があった。そのため、2020年度は合宿形式をやめ、調査地を決めずに、学生各自にテーマ、調査地を決定させることとした。先述した表1にあるように、主に山口県内で調査を行った学生は2名、県外で調査を行った学生は6名、両方で行った学生が2名であった。これにより、①学生の地元に関するテーマ、②家族・親族・知人に関するテーマ、③山口市に関するテーマ、の3種類に分かれた。

具体的なテーマとしては、①や③について祭りやイベント、生業に係るものの他に、②については、化粧、女性の仕事と子育て、マスク、留学生ネットワーク、制服などが見られた。これらのテーマは、例年の調査地を決める方法では、生まれないテーマであり、内容の広がりをもたらしたと言えるだろう。この形式の変化にともない、調査は主に夏季休暇中に各自で行うこととなった。

4年次の卒業論文は、3年次の終わりに仮テーマ発表を行い、4年次になると各自調査を進める。テーマ、調査地は各自の自由である。3年次の2月にテーマ発表、4年次の9月末に中間発表を行い、1月中旬に提出である。山口大学人文学部では、卒業論文の字数は2万字程度という規定がある。例年、調査地としては山口県や山口市、もしくは学生の出身地で行うという傾向がある。また、3年次の調査実習の調査地で、引き続き調査を行い、テーマも3年次と連続性をもたせて調査を行う場合もある。

卒業論文については、特に方法上変更はなかった。表2にあるように、主に山口県内で調査を行った学生は9名、県外で調査を行った学生は1名であった。

次に、2020年の3年次の民俗調査実習について述べる。

3 3年次調査実習

3.1 調査方法の変化とその影響

ここで、2020年度の山口大学人文学部における講義の実施状況について述べたい。時を

少しさかのぼり、2020年2月27日に当時の安倍晋三首相が「3月2日から学校を臨時休校にするよう要請する」とアナウンスし、公立の小中学校、県立の高校が休校措置となった。この時、大学は春休みに入っており、卒業式が中止になるという影響があった。山口大学人文学部では、当初2020年度の講義実施について、教室定員を減らすなどの感染予防を行い対面授業を実施するという方針であった。4月に入り、入学式は中止されたものの、短時間、分散形式で新生オリエンテーションが開催され、授業開始当日の4月13日に「専門科目のオンライン講義以外の開講を次週以降に遅らせる」との決定が連絡された。関東を中心に都市部では、大学の授業開始時期が2週間、ないし5月の連休明けなどに遅らせられていた。

4月17日に、当面の間、遠隔授業のみの実施、通信環境確保のため学内アクセスポイントの稼働、学生は限定的な場合を除き登校禁止などの方針が決められた。山口大学人文学部では2年次後期にコース・専門分野選択があり、所属ゼミが決定する。3年生になると各ゼミが始まり、民俗学・文化人類学分野の学生は並行して調査実習を履修する。そのため、4月、5月はゼミにおいても実習においても教員は指導学生である3年生と直接顔を合わせることなく、オンライン授業を行った。

その後、6月以降に大学全体で、実験、実習、語学などの授業で対面授業を申請し許可された場合に対面授業の実施が可能になった。本調査実習においても6月2日から教室で対面授業を実施した。夏に向かう中で、日本全国での新規感染者数も減少傾向にあり、夏休みの調査は対面で実施できそうだと考えていた矢先、7月17日に学生1名の感染が判明した⁶⁾。7月中旬から学生らは8月に行うインタビュー調査のアポイントメントをとり始めていた。特に、出身地において調査を行う学生は、県境を越えての移動の難しさや話者が高齢者の場合など感染不安を抱えていた。そのため、8月6日に、調査方法について「原則的に電話でのインタビューを推奨する」という連絡を学生に流した。調査の実施方法は学生と話者の選択に任された。初の感染症が拡大する中でその時々々の社会状況に応じて場当たりの対応した感否めないだろう。

以上の流れの中で実際の調査がどのように行われたのかについて述べる。まず、調査実習の平均インタビュー数である。表3に、2016年以降の本調査における各学生の平均インタビュー数を記した。2018年を除くと、例年7件前後で推移しており、2020年が特に少ないということはない。電話インタビューの数は、2020年に大きく増えている。

続いて、調査方法の割合については、図2(2019年)、図3(2020年)のようになった。2019年は日誌のデータから9月末実施の本調査において、対面調査が85件、電話は2件であった。2020年については、8月から2021年1月までの期間を対象として、インタビュー件数は102件であり、対面は46件、電話は34件、オンラインは10件、メールやLINEなどの文字媒体が12件である。対面調査は半数を割り、非対面型インタビュー(電話、オンライン、メール)が55%を占めた。オンラインは、LINEのビデオ通話やZoomなどを使用しており、どちらを使うかは相手によって決めていた。対面調査を全くしなかった学生は

1名であり、彼女は出身地の福岡県での調査を予定していたが、感染予防のためすべて電話調査となった。逆に全件対面調査という学生も1名おり、出身地の山口県萩市で実施した夏みかん栽培に関する調査についてすべて対面で行った。調査地が山口県内の学生については対面調査率が8割前後と高い傾向が見られた。調査地が山口県内ではない場合、対面調査率は概ね50%以下だった。ただし、対面調査率は少なくとも約3割で、4、5割は対面調査が実施できた。このように県外出身の学生が自身のネットワークを利用したテーマ、調査地にした場合、話者を見つけやすいというメリットがある一方で、感染状況によっては出身地への移動が難しくなるというデメリットがあることが分かった。

表3 調査実習の平均インタビュー数

年度・調査地	平均インタビュー数	電話インタビュー数
2016・角島	7.5	4
2017・周防大島	6.9	0
2018・下関	11	3
2019・長門	7.7	2
2020	7.4	36

※調査実習報告書中に記載されている本調査期間中の活動記録である日誌に氏名が掲載されている数のみをカウントした。「数人」「方々」といった表現の場合は1件としてカウントした。

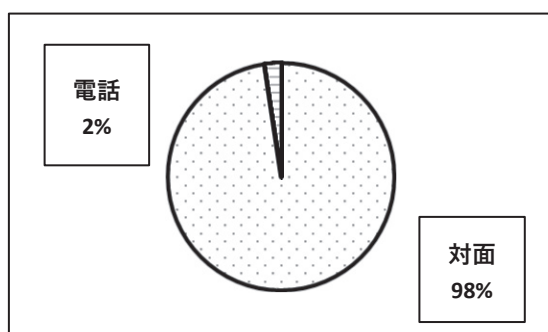


図2 2019年調査実習の調査方法の割合

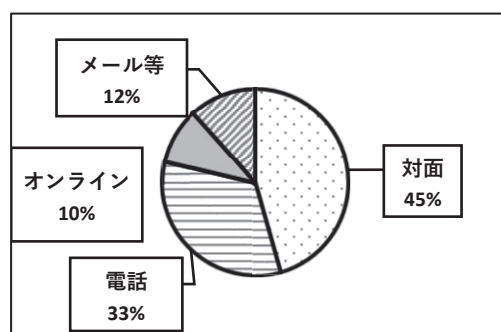


図3 2020年調査実習の調査方法の割合⁷⁾

次に、対面、電話、オンラインのメリット、デメリットについて質問紙、インタビュー調査の結果から述べる。電話調査についてメリットとして、「時間調整がうまくいき、予定を立てやすい」(学生H)、「まとまった時間やその場所に行くまでの移動時間がないため、どの時間でもインタビューしやすかった」(学生A)、「現地に移動するための交通費が浮く」「比較的アポがとりやすい」(学生G)などがあげられた。

電話のデメリットとしては、「相手の顔が見えないため、声だけで相手の気持ちを考えなければならない」「声だけのやりとりであるため、対面調査よりも事務的になりやすい」(学生H)、「時間が短かった」「対面の時と比べ、あまり仲良くなれなかった」(学生F)、「表情が分からず、間が多く感じた」「対面でのインタビューよりも得られる情報が少なかったように感じる」(学生A)、「身振り手振りが見えない」(学生B)、「少し聞きにくい質問などを

する時に、相手の表情が見えないのでどこまで深掘りして聞くべきか、それともやめておくべきかの判断が難しかった」(学生 G)、「電話は聞き取りづらい、聞き返すことを躊躇ってしまう」(学生 D)、「相手の表情が見えないのでいまいち感情がつかみにく感じた」(学生 J) などがあげられた。

オンライン調査について、メリットとして「移動しなくても済んだ」(学生 I)、「顔を見せて話すことが出来、現地にはいけなかったけど、世間話も多く、とても楽しくインタビューができた」(学生 F)、「コロナ禍である今、お互いに気を遣わずに調査ができる」(学生 B)、「移動に時間と費用がかからない」(学生 E) などがあげられた。

オンラインのデメリットとしては、「回線が途切れてしまったりする」「止まったりすることと思うように調査することができなかった」「時間差があったりしてポンポン質問を投げかけられないのは少し不便」(学生 I)、「接続が悪い時がある」(学生 F)、「通信環境によっては止まってしまったり、声が聞こえにくい時があった」(学生 B)、「会話の間合いが取りにくい」「話者が話している途中で相槌をうつと話者の音声途切れてしまう」「話者の雰囲気も感じ取りにくい」「話者が作ったもの(マスク、筆者補足)に直接触れてみるができない」(学生 E) などがあげられた。

オンラインの工夫としては「聞き取りやすくするためにゆっくり話したりと気を遣って話す」(学生 I) といったことがあげられた。また、接続に関して主にパソコンで使用するウェブ会議サービスである Zoom は、中高年の話者には取り扱いが難しく、同居している若い世代に接続してもらい、または手近な LINE アプリのビデオ通話を使用するという例があった。Zoom は大学生にとっては授業などで利用しており慣れている話者が多かったという。また、特に留学生とは聞き取りにくい時にチャット機能を使い、補足することが可能だったという。

対面調査については、電話やオンライン調査のデメリットの逆の性質がメリットとして実感されていた。例えば、茶栽培について調査した学生 F は、対面、オンライン、電話調査の3種類を行い、その違いについて次のように述べた。「やはり対面でインタビューをした方がお互い顔を合わせるので仲良くなることが出来た。そして、インタビュー時には、前もって自分が準備していた以外の質問もたくさんでき、話者の方もそのぎ茶についていろいろなことを詳しく教えてくれたように感じた」という。対面調査の時には、茶畑を車で案内してもらい、茶栽培以外のことも教えてもらった。たとえば、畑の脇辺りから「イノシシが出るよ」、たい肥小屋では車の中で「俺は(臭いから)行かないから写真撮っておいで」と言われたり、畑の脇の茶葉をとって「これ(そのままで)食べられるんだよ」と教えてくれた。彼女は、対面調査において話者が生き生きと活動している様子を目にできたという。

このように調査対象物を直接目にする、ということはテーマによって非常に重要である。夏みかん栽培について調査した学生 D は、虫の名前や畑の広さの単位である「反」など、実際に畑を歩きながら説明を受けたためイメージしやすかったという。初めて聞く単語の場合、電話だと何を指しているのか理解しづらい。学生 D の話者の一人は、夏みかん栽培

に利用する道具の使い方を説明しながら実演して見せてくれたという。また、栽培した夏みかんを運搬する「トップカー」という車が木と木の間を通る、という説明も実際に畑の木の間隔を見たため分かりやすかったと回答している。

手作りマスクについて調査した学生 E は、「やはり対面で実際にマスクを作らせて頂いた経験はすごく貴重だったなと感じる。オンラインでの調査もできないことはないが、やはり実際にモノに触れてみて、調査対象をより理解するという点では対面に勝るものはないなと感じている」と回答している。

次に、これらの調査の結果としての報告書について述べる。各学生が執筆した 1 章分の平均文字数、最多文字数、最小文字数を表 4 に示した。

表 4 報告書の平均文字数

年度・調査地	平均文字数	最多文字数	最少文字数
2016・角島	7,648	10,985	4,579
2017・周防大島	6,495	12,086	3,816
2018・下関	11,412	27,195	6,126
2019・長門	16,617	21,566	12,238
2020	11,658	20,880	6,553

平均文字数は、2020 年度は前年度に比べると 5 千字程度減少している。最多文字数は、2 万字程度と変化はないが最少文字数は 6 千字程度であり、個人差が大きくなっていることが分かる。先述したように平均インタビュー数は 2019 年 7.7 件、2020 年 7.4 件とあまり変化がないため、対面インタビュー以外の電話・オンライン・メールインタビューの増加によって、各調査の情報量が減少したと推測できる。ただし、2018 年以前と比較すると 2020 年は増加傾向にあり、単純に減少した原因をコロナ禍のみに帰することはできないだろう。

次に、具体的な新型コロナの影響について学生の質問紙、インタビュー調査から述べる。

3.2 コロナ禍の影響

コロナ禍について、ほぼすべての学生が影響があったと述べた。どのような影響があったか、その内容や程度については様々である。

テーマに関して影響が大きかったと感じた学生は、②家族・親族・知人に関するテーマを選んだ学生に多かった。そもそも、調査対象者を家族・親族・知人にした方がよい、という方針のためテーマが限られた。学生 E は、山口大学吉田キャンパスの近くにある湯田温泉の観光に関するテーマを設定しようとしていたが、コロナのため観光客が減少しており断念した。その後、むしろコロナ禍を逆手にとり、コロナならではの「手作りマスク」をテーマとした。また、先述したようにコロナの為に調査地を自由にしたことによりメリットを感じた学生もいた。学生 H は、2 年生の頃から出身地のお祭りを調査したいと希望しており、すぐテーマが決定したという。学生 A も、もともと化粧について興味があり、コロナ禍で

自由にテーマを決められたため可能になって良かったと述べている。以上の手作りマスクや化粧などは、従来型の調査地を決める形式だったら、成立しないテーマであったと考えられる。

このように学生の出身地で調査を行う場合は、インフォーマントを自身や家族、親族のネットワークで探せるというメリットがある。このメリットは、後述する卒業論文の調査においても有効であるが、4年生になると就職活動との兼ね合いなどがあり、例年、山口県内で行う学生の方が多いため、3年次に自由に調査地が選べるメリットがあったと考えられる。

インフォーマント探しに影響があった学生もいた。学生Ⅰは、留学生を調査対象にしており、6月頃から紹介してもらっていたが、7月頃には留学生が次々と帰国してしまった。最終的に、7名の留学生に調査を行ったが結果として長期滞在する大学院生が中心となった。

3年生で唯一「影響は特になかったと感じる」とアンケートに答えた学生Cは、山口市内のイベントをテーマとしていた。彼は、補足調査でメールを使用しているがそれ以外のインタビューはすべて対面で行っており、「インタビューは一人に対して行うことが多く、県内の人だけにのみ行ったため、通常の感染対策をしていれば十分調査を行えた」とのことである。調査対象者は、「対面でいいよ」と言ってくれたそうだ。ただ、実際のインタビューでは、「相手の表情がわかりにくく、初対面の人とお互いマスクを着けて会話すると相手の表情が窺えないため、なかなか踏み入った質問をしにくいように感じられた」という。また、イベント自体が2020年度には中止になってしまい、イベントの雰囲気を体感できなかったというところも困ったこととして挙げられていた。

感染者が少ない出身地で調査を行う学生は、対面調査を断られることがあった。地元の市町村内に感染者が1人も出ていない場合は、山口市内から帰るルートを尋ねられたり、実家から近い親戚でも電話調査になったり、「会食しちゃだめよ」と言われたりしたという。対面調査を行えた相手でも長時間の調査を断られる、近くに住んでいる相手でもコロナが怖いから対面調査を断られた場合があった。

以上の調査を行う上で、多くの学生が感染対策を行っていた。対面調査の場合は、手指の消毒、マスクの着用などを行い、対面時に距離を取る、帰省する場合は、移動後から調査まで一定期間を空けるなどしていた。ある学生は、調査の前には電車に乗らないようにする、前日にあまり人と会わないようにするなど、自主的に工夫したという。帰省時に、車で移動して、公共交通機関を使わないようにする学生もいた。また、地元のほうが山口市より感染者が多く、逆に山口市に戻ってから感染を広めないように、各駅停車の新幹線に乗車するなどの対策をとった学生もいた。

以上のように、コロナ禍というすべての人が初体験であった状況に対して、学生たちは自主的に考え、行動していた様子が見て取れた。

3.3 調査実習以外への影響

調査実習以外への影響として、次のような意見が聞かれた。4、5月中は、オンライン

授業だったため、ほかの学生の存在を感じ取れない、という学生が多くいた。授業中に複数回発表を行ったが、オンラインのため参加者の姿や顔が見えず、「みんな聞いているのかな？」と思ったという。

コロナ禍においては授業時間以外の交流にも影響が出た。例年なら、3つのゼミの学生が集まる実習において、ゼミの枠を超えた交流を持つ機会がある。月1回の学生研究室の掃除を兼ねた交流会、9月の実習前の自主的な交流会、3泊4日の実習で寝食を共にする、前期後期1回ずつの日帰り調査などである。それらが開催できず、授業時のみマスクを着けて集合する、という中で「話をするタイミングなかった」「仲良くならなかった」「他ゼミとの情報交換が全然ない」という状況が続いた。この状況は、2021年度、彼・彼女らが4年生になっても一部続いており、夏休みの卒論中間発表時においてなお他ゼミの学生で個人的に会話したことがないという間柄の学生もいた。

同じゼミの中では徐々に顔見知りになり、2020年6月以降に対面授業が開始するにつれて、「ゼミの3年生とはよく相談できてよかった」「(ゼミ内の)同じ学年同士で相談できた」という。また同じゼミの3年生同士でLINEグループを作り、それが大きな支えになったという意見もあった。教員については、オンラインより対面授業の方が指導がマイルドに受け止められたようだ。

では、次に4年生の卒業論文について述べる。

4 4年次卒業論文

4.1 調査方法の変化とその影響

本節では、4年次の卒業論文について記述する。2020年卒論の調査方法について、割合を示したのが図4である。卒論については、2020年のみのデータとなる。回答者10名の学生が、合計112件のインタビューを行い、対面は62件、電話29件、オンライン3件、メール等18件となっている。対面調査が55%であり、非対面型インタビューが45%を占めた。対面調査のみを行った学生が2名、電話調査が極少ない学生が2名であった。4年生の場合、表2にあるように、山口県内を調査対象地とした学生が9名、県外を対象とした学生が1名であり圧倒的に県内が多い。しかし、県内を調査地にしても、対面調査以外を行う場合もあり、対象者の特性によるところが多い。

例えば、寄り鯨の処理と活用について調べた学生Qは、話者に漁業関係者（漁師、網元、魚市場の関係者）が多かったため、仕事終わりの早朝5時半ころに自宅から電話をかけていた。調査地まで公共交通機関を利用して移動すると、朝9時に出発して昼過ぎに到着するという。

山口市の子育て支援について調査した学生Oは、調査相手から家が遠いので書面で調査に協力したいという申し出があり、対面調査用に用意した質問を掲載した調査票を送付した。他に、イニシャル希望や匿名希望の話者にも、書面で協力してもらった。彼女によれば、「調査の趣旨を説明すると、話者から質問される、それによってこちらの調査の意図や目的、

どのような回答を望んでいるかが相手に伝わるのではないかと、書面だと同じ事は書いたが理解が得られないのではないかと思いながら送った」という状況だったという。書面で回答する場合でも、事前に対面で調査の趣旨などを説明した方は話すように詳細に回答してくれたが、まったく対面で会っていない場合は書面での回答も短くなる傾向があった。書面はアプ取りが必要ないという点では楽だったという。

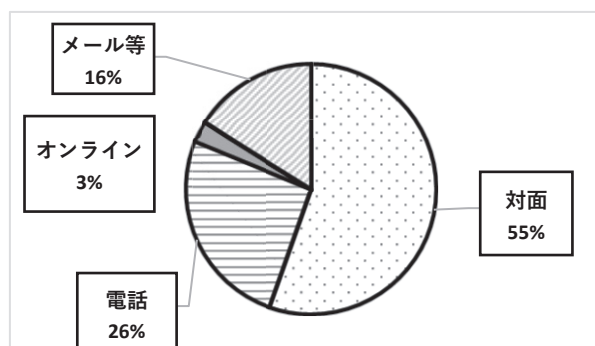


図 4 2020 年卒論における調査方法の割合

同じく文字による調査の珍しい例として手紙を用いた学生もいた。学生 M は神社の宮司に対して祭りについての質問項目を送った。彼の調査対象は島にある神社の祭りであったが、山口市内、山口大学内で新型コロナ感染者がでるようになると当該地域における対面での調査が難しくなった。話者はメールが出来ず、電話調査は学生 M の事情で難しかった。そのため、聞きたいことは手紙で尋ねるということになった。学生 M は、手紙のメリットについて「すでに文字化されたものが来るので、ノートをつける必要がない」、デメリットとして、「一往復にかかる時間が対面調査の比じゃない。あまり長文で返ってくることはなく、情報量としては 10 分で聞けるような程度になる。達筆すぎて読めない。送った質問がこちらの意図とは違って伝わり、以前聞いた話とうり二つな話が返ってくる」などを挙げている。以上から、複数人に対する構造的な質問調査は書面でも可能であるが、非構造的な質問に対して書面で回答を得るのは難しいことがわかる。

卒論でオンライン調査を行ったのは学生 T のみであった。彼はテーマを変更している。2020 年 2 月のテーマ発表時には、飲み会の「コール（掛け声）」をテーマにしていたが、コロナ禍で対面の飲み会が行われなくなったため、春頃にオンライン飲み会に変更した。実際にオンラインでの飲み会の場に参加して調査を行うという、コロナ禍ならではの調査となった。彼によれば、Zoom だとトーンが伝わらず、初めの 5 分間は会話が繋がらず大変だったという。

次に、4 年生が卒論調査で感じた対面、電話、オンライン、メール調査のメリット、デメリットについて述べる。電話調査のメリットとして、「気軽さ」「調査地が遠いと電話が便利」（学生 Q）、「時間的なロスが少ない」「聞きたいことがすぐ聞ける」（学生 M）、「確認した

いことやちょっとした質問をすぐに聞ける」「対面に比べて、時間と手間をとらないので少し気軽に聞くことができた」(学生 N)、「直接調査現場に出向く必要がない」(学生 T)、「コロナ感染のリスクを気にすることなく調査を行えた。また、どこにいても調査ができた」(学生 R) などがあげられた。

電話のデメリットとしては、「顔が見えないと不安」「どう思われているか不安」(学生 P)、「対面に比べて得られる情報量が少ないことと、電話がつながらなかった場合の折り返しやかけ直しが重なると逆に手間になる」「電話越しだと話者の身振り手振りや表情などの視覚的な情報が得られないため、情報が少なくなることと、対象との距離も縮まりづらい」(学生 N)、「相手の心境であったり、会話の流れなどが感じ取りにくい」(学生 T)、「表情が見えないため、自分が発した言葉を相手がどのように受け取っているかが分からず、話しづらかった」(学生 R) などがあげられた。また、そもそも「特定の人物の調査でなく、その場にいる誰かに話を聞きたい場合は電話での調査は出来ないと思われる」(学生 R) という指摘もあった。学生 R は、朝市をテーマにしており、まず朝市に行かないと利用者に会えないという状況だった。

メール調査については、「良かったことは日程の調整が必要なかったこと。悪かったことは対面調査とほぼ同じ質問内容の調査票を送ったため、こちらの質問の意図が十分に伝わっていないと感じる回答が多かったこと」(学生 O)、「文章で質問を正確に伝えることが難しかった。また、重ねての質問がしにくかった。相手の都合のいい時間などは気にしなくてもよかったので、電話に比べると気楽ではあった」(学生 P) などが指摘された。文字の場合、主に質問の意図を相手に伝えるという情報伝達に難しさを感じていたようだ。

対面調査について、学生 Q は「人間関係を築ける」と述べている。また、話者の関係者の人が同席していた場合、その場にいるならその人とも関係を築けたという。対面調査では雑談ができて「ぼろっと意外なことがきける」そうだ。ローカルな話を中心にテーマとは直接関係のないような地元のつながりについて話ができた。対面調査では、話を聞く以外に写真を撮影できる。漁船の写真を撮らせてもらったり、実際に乗せてもらい、たとえば「クジラをとるときに甲板の段差があると…」といった説明の“段差”を確認できた。生け簀の様子を見学したり、先述した学生 D の夏みかん栽培についての調査と同じように、道具の使い方などをその場でやって見せてくれたりした。学生 Q は「得られる情報量に差が出る」と指摘した。

表 5 卒論の平均文字数

年度	平均文字	最多文字数	最小文字
2016	26,217	37,172	18,675
2017	32,220	57,852	19,899
2018	28,745	55,853	22,009
2019	33,790	60,801	23,812
2020	27,830	42,658	18,588

卒論の文字数について表にしたものが表 5 である。平均文字数は、2019 年から約 6,000 字減少している。最小文字数は、2020 年において 2 万字を下回ったものがあった。平均文字数は、2018 年と比較すると 900 字程度の減少であり、コロナ禍のみが原因かは断定しにくい。

次に、具体的な新型コロナの影響について学生への質問紙、インタビュー調査から述べる。

4.2 コロナ禍の影響

4 年生の卒論もコロナ禍の影響を受けた。特に 4 年生の卒論は、3 年次の 2 月頃から研究を始めるため影響は長期間にわたった。

学生 N は、テーマを変更しなければならなくなった。先述した 3 年次の調査実習でも観光についてのテーマを変更した学生がいたが、学生 N は当初福岡県の太宰府天満宮の名物である梅が枝餅をテーマにしていた。ところが、2020 年 4 月に緊急事態宣言が発令され、梅が枝餅販売店が軒並み営業を自粛し、また遠方での調査を避けるという理由で 6 月にテーマを山口市内の酒蔵に変更した。彼は、3 年次の調査実習で酒蔵を調査したため、調査地を変えて引き続き酒蔵について卒論で扱うことにした。また、梅が枝餅についての調査は 5 月時点で一度も行っていなかったため切り替えもスムーズだったという。

先述したように学生 T は、同じくテーマを飲み会の「コール」からオンライン居酒屋・オンラインキャバクラに変更した。春頃にテーマを変更し、実際のオンライン居酒屋に客として応募した。参加希望者が一定数集まれば開催予定だったが、人数が集まらなかったため主催者にオンラインキャバクラに誘われたという。学生 T によれば、「居酒屋の研究は、酔っぱらっていないといけないという先行研究もあり」、客として参与観察した。学生 T は、「オンラインキャバクラといった特殊な接客形態を持つ職業について調査をしたことにより、コロナ禍における新しい文化を知ることができ、それに携わっているキャストの方々など全国各地に住まれている方々と会話ができたのは貴重な経験だったと思う。しかし、対面で話ができなかったことでなかなか会話の深掘りなどが難しかったと思う部分もあった」と述べている。

学生 S は、3 年次の時は岡山県の服飾を取り上げる予定だったが、「山口県外での調査は厳しいな」と感じ、山口県内の靴職人を対象にすることにした。1 人の職人に焦点を当てたため調査自体にはコロナ禍の影響がなかったという。学生 S は、「山口県で靴づくりをしている U さんと出会い、U さんの人となりなどにも触れることができたため、調査の対象を変えてよかったと考えている」と述べている。

以上の学生はテーマや調査対象を変更せざるを得なかったが、その状況をポジティブにとらえていることが分かる。他にも調査対象となる祭りやイベントが開催されず苦勞した学生がいる。

学生 K は、当初プロサッカーチームが地域社会において果たす役割について調査する予

定だった。ところが、Jリーグは、2020年4月から活動を停止して、イベントは軒並み中止となった。各種イベントが中止になり、地域社会との交流がなくなり、テーマも若干の変更を余儀なくされた。学生Kは、コロナ禍の影響について「イベントが中止になったこと。サッカー教室の回数が減りデータ集めに苦労したこと」と述べている。9月以降に、チームのサッカー教室で指導補助のアルバイトを始めたことから、サッカー教室を対象として調査を進めることになった。チームの選手は、Jリーグが再開し過密スケジュールになったため調査が難しくなり関係者の活動状況に合わせて調査を行った。実際の調査は、山口県内ですべて対面で行えたが、テーマや調査対象の微調整には苦労していたようだった。

学生Pは、10月中旬開催の地元の祭りを調査したが、2020年6、7月頃に中止が決まった。彼女は、大学入学時から自分の地元の祭りを研究したいと考えており、前年の3年次に祭りを見学し、写真を撮影していたという。学生Pは、「前年に祭りを見学して、写真を撮影しておいてよかった」と述べた。夏休み中に地元で対面調査を行い、10月以降は電話やメールなどで補足調査を行った。

学生Mは、先述した通り、現地調査が難しくなった。学生Mはコロナの影響について、「アポ取りから調査に至るまで全面的に見直す必要が出てきた。対面での調査ができなくなり、調査地に入っても何もできないため、フラット入っておしゃべりだけして帰ってくることもなくなった」と記述している。学生Mの調査地は島の先端部の集落であり、当時感染者が出ていなかったため、外部者に対する警戒が高まっていたと考えられる。学生Mは、3年次から当該地域に調査に入っており、感染状況が深刻化する前は、顔を見せに行ったり、アポがない時でも歩いている人と目があったら話をするなど、調査地域に足しげく通っていた。手紙での調査は、トータルで6通もらったという。返事が来るのに1か月近くかかり、話者は以前に何を書いたか忘れて内容が重なっていることもあった。手紙の内容は、あいさつ文、質問項目であり、それに対して「①について～」、というように返事が返ってきた。返事は達筆で判読が難しい部分は、アルバイト先の塾の国語の教師に教えてもらったという。その一方で、市役所やローカルテレビには、メールで調査した。メールの返事は送った翌日に返ってきて、「(調査)地区とこちらでは流れている時間が違うと感じた」「(調査地区では時間の流れが) ゆっくりしている」と感じたという。彼は、山口県内で初感染者が報告された衝撃は大きかったと述べた。新型コロナが身近に迫ってきている、という実感があり、調査地区の対応についても理解を示していたようだ。

4年生は卒業論文のほかに、就職活動も並行して行う。山口大学では、先述したように緊急事態宣言が発令されている地域へ移動した場合は、2週間自宅待機するという規則があったため、就職活動での移動により卒業論文の調査に支障がでた学生もいた。学生Rは、山口大学近くの朝市について調査していたが、「地元が緊急事態宣言に当てはまる地域だったことから、対面調査前に2週間の自粛期間を設ける必要があり、8～9月は就職活動で試験や面接を受ける間隔が短く2週間を確保できなかったため、対面調査ができなかった」という。朝市に実際に足を運ぶことにより話者を見つける、という調査のため、電話調査は難

しかったという。

4.3 卒業論文以外への影響

卒業論文以外への影響としては、3年生と同じく他の学生との交流の欠如を指摘する学生が多かった。学生 Q は、「研究室や大学に行くことが少なかったため、研究室のメンバーと卒論について相談する機会がなかった」と述べた。また、教員との交流が減少したという意見もあった。学生 P は、教員に相談しづらく、そもそも研究室を訪ねてよいのかと遠慮していたという。オンラインで発表の時は、画面がパワーポイントのスライドだけになって顔が見えないため「みんな話きいているのかな？」と心配になった。同じく学生 O は、大学に行かなくてよいのは楽だが、やはりオンラインゼミで発表するときにスライド以外何もみえず「そもそも聞こえているのかな？」と心配になったという。また、質問もしづらく手をあげても見えてないのではないかと思いミュートはせずして「質問いいですか」と言わなくてはならなかった。

また、複数の学生が雑談や授業中の学生同士の会話の重要性を指摘していた。学生 L は、オンラインだと会話がスムーズにいかず、対面だとぽつと「関係ないかもしれないけど」といって話題を提供しやすいという。この一見「無駄っぽい話が役にたつ」という。決まりきった話だとひらめきがなく、無駄に見える話の中に「こういう見方もあるのだ」という展開があるという。同じく学生 T は、オンラインだとゼミなどで活発な議論をすることが難しかったという。教員の質問に対して、学生が答えることはできたが、学生同士で相談したりすることができなかった。

さらに、4年生では、縦の交流の欠如を意識していた学生もいた。学生 K は、卒論が個人戦になり、他ゼミとの交流がなく、特に他ゼミの後輩との交流がなかったことを指摘した。自分が3年生の時は、他ゼミの先輩とも相談したり、公務員試験の情報や試験問題を見せってもらうなどできた。しかし、自分は他ゼミの後輩とは交流もなく、「後輩に残せるものがないのが一番心残り」と述べた。

2020 年は世界全体が新型コロナウイルスに初めて対応することとなり、社会全体が未曾有の事態に直面していた。4年生が体験したコロナ禍における就職活動もそうであり、特に公務員試験は日程が2か月後ろ倒しになった。例年4月から順次国家公務員、地方公務員の試験が行われていたが2020年については、6月以降に延期され⁸⁾、それに伴い公務員志望の学生の卒業論文の調査が遅れがちになった。民間企業についても、説明会の中止やオンライン説明会・試験・面接への移行など多様な変更があった。このような予測不可能な状況下で4年次の学生は就職活動と卒業論文を進めていたのである。

5 考察

本章では、以上のデータを踏まえて3点について考察する。第一に、民俗調査で行う質的調査へのコロナ禍の影響である。2020年の3年次の民俗調査実習、4年次の卒業研究にお

いて、それぞれ約半数のインタビューが対面調査で行われ、それ以外は移動の難しさや感染防止のため電話調査、オンライン調査、メール等の調査で実施された。その影響については、数値化できるものとしては成果物の文字数の減少という結果が得られた。しかし、ここで注目したいのは学生が調査を行う上で感じた「実感」である。電話調査やオンライン調査、メール等の調査におけるやりづらさ、対面調査との違い、不足している感触を多くの学生が感じていた。それは、インタビュー調査だけでなくコミュニケーションの方法としても通じるものではないだろうか。

これまでの事例で見てきたように民俗調査で行う半構造化インタビューや非構造化インタビューは、対面調査を第一として、顔が見えるオンライン調査、音声情報のみの電話調査と徐々に難しくなることが分かった。そこには、身振り手振りなどの調査対象者についての視覚情報の欠如や、調査対象物についての視覚情報の欠如という具体的な影響と、調査者と調査対象者との関係性や信頼関係の構築の難しさという心理的な影響の 2 つのレベルがあると考えられる。後者については、くしくも対面調査によって「仲良くなることが出来た」と表現した学生がいたように文化人類学のフィールドワークで重要とされるラポール（信頼関係）の構築に対面調査が最も適していることが示されたといえるだろう。

第二に実習や卒業論文を進める場であるゼミの実施において、先行研究であったように学生同士のコミュニケーションの欠如が見られた（山中他 2021，飯田他 2021）。講義形式の授業と異なり、実習やゼミなどでは学生同士の教え合いやおしゃべり、友人との交流、教師や友人への自由な質問・相談が学びを進める上で、重要な効果をもたらしていることがその欠如の認識によって浮かび上がったといえるだろう。

第三に、コロナ禍を契機として人々に強く認識された「境」の意識である。コロナ禍において、残念ながら感染者や医療従事者などをはじめとして色々な人たちに対する差別が起こった（水巻 2021，田代 2021）。感染者以外でも、県外ナンバー車への差別や、首都圏などから地方に帰省する人々への差別などが起こった⁹⁾。その状況に対して、2021 年 2 月 3 日には「新型インフルエンザ等対策特別措置法等の一部を改正する法律」が成立し、新型インフルエンザ等患者等に対する差別的取扱い等の防止に係る国及び地方公共団体の責務が定められた¹⁰⁾。

確かに、今回の新型コロナウイルスへの対応単位として、都道府県や市区町村が大きな役割を果たした。毎日ニュースでは県や市町村単位での感染者数の発表があり、移動の制限も県境を基準に設定された。山口県では、知事から県外との往来にあたっての注意において、「県外との往来は、通勤、通学、通院等やむを得ないものを除き、自粛を強くお願いします」と依頼された¹¹⁾。実際には同一県内においても感染状況に濃淡があり、緊急事態宣言が発令されている都道府県内においても感染者が少ない地域もあり、「県境」は感染対策上、絶対的な科学的根拠のあるボーダーでないだろう。しかし、メディア報道や行政の対策上において「県境」は強い意味を持ち、人々の認識にも影響を与えた。学生が調査を行う上でも、普段はまったく意識せずに越えている県境や市境が様々な形で浮かび上がったといえるだ

ろう。

6 おわりに

以上、2020 年度山口大学人文学部社会学コース、民俗学・文化人類学分野所属の 3、4 年生がコロナ禍においてどのように民俗調査実習、卒業論文を進めてきたかみてきた。多くの学生が何らかの形でコロナ禍の影響を受けた。具体的には、調査方法が対面調査から電話・オンライン・メール等の非対面調査との混合になった。非対面調査については移動時間や費用の節約、アポイントメントの取りやすさなどのメリットも感じられており、さらに多様な調査方法を並行することにより対面調査の良さや特徴がより実感できた学生もいた。他にもテーマの変更、話者の変更などがあり、学生は未曾有の状況に臨機応変に対応していた様子がわかった。

民俗調査は、学生、研究者など誰が行うかに関わらず地域の人々の厚意と協力の上に成り立っている。コロナ禍においても民俗調査が行えたことについてご協力いただいた方々には感謝の念に堪えない。テーマについては、手作りマスクやオンラインでの飲み会、コロナ禍における祭礼など、コロナ禍の人々の生活についての貴重な記録が得られた。次善の調査方法しかとれないとしても、人々の生活について調査をして記録していく意義はコロナ禍においても失われてはいないといえるだろう。

対面調査を基本とする民俗調査がウィズコロナ、望むらくはポストコロナ時代にどのように進められるか。本論では電話調査、オンライン調査におけるメリットの一部が提示できただろう。移動の制限が少ない身近な地域を調査対象とする、状況に応じて調査方法を変えるなど知恵を絞って制限がある中でも調査活動、研究活動を続けていく姿勢が必要とされるのではないだろうか。

【注】

- 1) 「新型コロナウイルス感染者数・死者数の推移・累計グラフ：最新ニュース NHK」より作成、2020 年 1 月 16 日～2021 年 12 月 31 日、(<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/data/>、最終閲覧 2022 年 1 月 13 日)。
- 2) 内閣官房長官ホームページ「新型コロナウイルス感染症対策」より (<https://corona.go.jp/emergency/>、最終閲覧 2021 年 12 月 5 日)。
- 3) 山口大学 HP「新型コロナウイルスへの対応」参照 (http://www.yamaguchi-u.ac.jp/_8288.html、最終閲覧 2021 年 12 月 5 日)
- 4) 質問項目は以下である。新型コロナウイルス流行によって調査実習にどのような影響がありましたか、対面調査以外の調査についてメリット、デメリット、対面調査との違い、その他、調査実習を行う上で新型コロナウイルス流行に関連して困ったこと、良かったこと、工夫などについて、である。
- 5) 2020 年 3 月 27 日に一般社団法人社会調査協会から資格参加機関に「科目認定基準の弾力的運用について」という連絡がきた。新型コロナウイルスによって授業の実施に影響がでているため、科目認定基

準を弾力的に運用するようにとの内容である。一般社団法人社会調査協会 HP 参照 (<https://jasr.or.jp/>、最終閲覧 2021 年 12 月 21 日)。

- 6) 山口大学 HP「新型コロナウイルスへの対応」「感染確認状況について」参照 (http://www.yamaguchi-u.ac.jp/_8288/_8986.html、最終閲覧 2021 年 12 月 5 日)。
- 7) 学生 10 名からの回答を元に作成。2020 年 4 月～2021 年 1 月までの調査を含む。
- 8) 公務員試験総合ガイド「公務員試験日程一覧」参照 (<https://90r.jp/schedule.html>、最終閲覧 2021 年 12 月 5 日)。
- 9) 2020 年 4 月中旬に、地域による感染者の発生状況に違いがあり、一部の県では県外の人に不要不急の来県の自粛を求める声明が出された (2020 年 4 月 15 日『朝日新聞』)。それに伴い高速道路のインターチェンジや観光施設などで県外ナンバーの車の調査が行われ、「県外ナンバーの車のドライバーへの暴言やあおり運転などがみられる」ようになった (2020 年 4 月 25 日『朝日新聞』)。県内在住だが県外ナンバー車を使用している県民のための「県内在住です」と記したステッカーを市町村で配布された (2020 年 5 月 14 日『朝日新聞』)。2020 年の夏には、県外からの帰省を予定している人へ「感染拡大地域からの帰省は慎重に、体調が悪いときは移動を控えて」、県民に「感染拡大地域への帰省や旅行は控えて」といったメッセージが出されるなどした (2020 年 8 月 5 日『朝日新聞』)。
- 10) 法務省 HP「新型コロナウイルス感染症に関連した偏見や差別をなくしましょう」参照 (https://www.moj.go.jp/JINKEN/stop_coronasabetsu.html、最終閲覧 2021 年 12 月 19 日)。
- 11) 山口県 HP「新型コロナウイルス感染症関連情報 (知事からのメッセージ)」参照 (<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a10000/korona2020/202004240001.html#1>、最終閲覧 2021 年 12 月 19 日)。

【謝辞】

本稿は、山口大学時間学研究所主催山口大学プロジェクト「コロナの時間学～新型コロナウイルスが人間と社会に対して与える時間的影響～」の採択課題「コロナ禍の民俗調査において流れる時間の比較―対面、電話、オンライン調査」の調査に基づいています。発表、質疑応答の際にご助言いただいたみなさまに感謝いたします。調査にご協力いただいた 2020 年度山口大学人文学部社会学コース、民俗学・文化人類学分野に所属していた 3 年生、4 年生のみなさまにお礼申し上げます。また、3 年生の調査実習、4 年生の卒業論文を共に指導いただきました谷部真吾准教授、小林宏至准教授にも深謝いたします。

【参考文献】

- 飯田俊二・井上哲, 2021, 「新型コロナウイルス感染症が学生生活に及ぼした影響―北海道大学歯学部 6 年生へのアンケート調査―」『北海道歯誌』42 : 44-51.
- 黄薇・陣内未来・木村円香・木村拓也・鮑威, 2021, 「コロナ禍における大学生のオンライン学習状況に関する調査報告 (速報) : 九州大学と北京大学の比較」『九州大学教育社会学研究集録』22 : 45-52.
- 恩田守雄, 2021, 「東マレーシアの互助慣行―ボルネオ島サバ州サラワク州のオンライン・インタビュー調査を中心に」『社会学部論叢』31 (2) : 17-33.

- 辛島光彦, 2021, 「コロナ禍対応のオンライン授業に対する理系学生の意識調査—文系学生の意識調査との比較—」『東海大学紀要情報通信学部』14 (1) : 1-9.
- 田代亜紀, 2021, 「感染者差別について考える」『法学教室』486 : 38-42.
- 谷口敬道・新井田孝裕, 2021, 「COVID-19 の影響による国際医療福祉大学における学部のオンライン授業等の対応 (2020 年度前期)」『国際医療福祉大学学会誌』26 (2) 1-11.
- 水卷中正, 2021, 「看護師との連帯感をもちながら、新型コロナウイルス感染症を正しく恐れ、闘う：看護師への差別や医療機関への風評被害の実態」『看護展望』46 (10) : 946-948.
- 山津幸司, 2021, 「新型コロナウイルス感染症蔓延から 1 年後の大学体育の開講状況：九州地区国立教員養成大学・学部の分析結果からの第二報」『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』8 (1) : 1-14.
- 山中大子・川端博子, 2021, 「オンライン被服製作実習『刺し子』の実践課題—大学生へのインタビューと質問紙調査の分析—」『埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要』19 : 49-56.

所属：山口大学人文学部

E-mail : mutsumi@yamaguchi-u.ac.jp